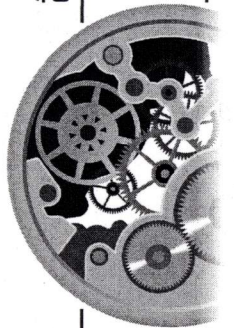


# 越境精神

小長谷 有紀



## 梅棹忠夫の残したもの 16

### 原子カビジネス

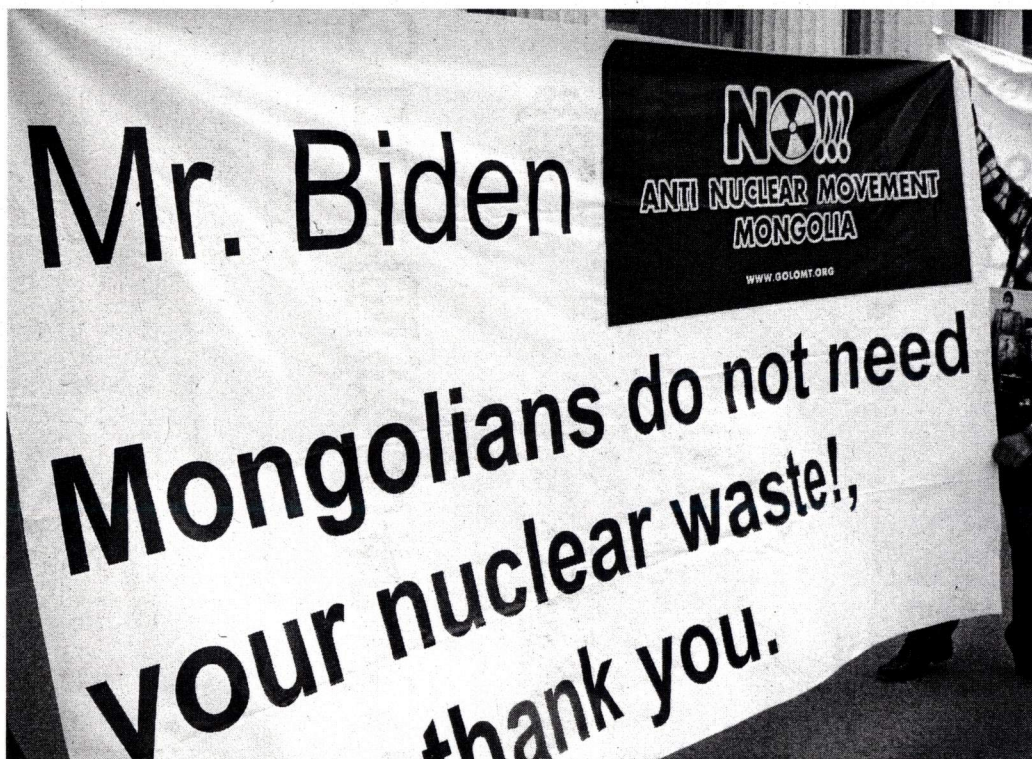
1986年3月、梅棹忠夫は65歳で失明した。以降、唯一出かけた海外、それがモンゴルである。1997年8月、ウランバートルで開催された第7回国際モンゴル学会に出席し、名誉会員証を授与された。

国際モンゴル学会は、ほぼ5年に1度のペースで、首都ウランバートルで開かれる。今年はこちらで第10回にあたり、8月9日から13日まで開催された。およそ30人から約380人が参加した。

私は地方での調査のため参加できなかったが、共同研究者であるインド人のマクソータさんが代表して報告した。社会主義を放棄して以降、市場経済への移行期に入り、さらに移行期も終わった現在までの間、女性たちがいかに活躍しているかという内容である。調査はまだ緒に付いたばかりなのに、発表直後、出版の申し出があったらしい。成功物語から現代社会を考察するというユニークな視点が注目されたのだろう。

現地の報道によれば、同じ頃、モンゴル原子力エネルギー庁、国際原子力機関と、日本の原子力研

## 建前からの目覚め



今年8月、モンゴル国立図書館前で行われた核ゴミ捨て場計画反対の抗議デモ

究開発機構が共同で「原子力の平和利用と核兵器拡散防止」をテーマ

に国際会議を催した。モンゴルで原発を来年着工し、2017年に稼動する予定だという。また、日本の原子力研究開発機構の主任

研究員は「日本としてモンゴルの原子力の平和利用のために技術を提供し、安全制御をサポートできればうれしい」と語ったという。フクシマが国際語になった悲しみはとてつもなく大きい。例えば、英国インディペンデント紙は8月29日、放射線被曝による死者がチェルノブイリを超えて今後100万人に達するだろうという専門家の予測を紹介している。

放射能被災を真摯に受けとめて、世界が脱原発に向けて文明の舵を切ろうとしている。にもかかわらず、艱難辛苦の当事者である日本が主役になって、原発を輸出しようとしているのである。税金を使い、学術会議を装い、「平和利用」を謳いながら。

しかも、モンゴルにはウランが豊富なため、日本が輸入した使用済み核燃料をモンゴルに戻すという仕組みが用意されている。その際に、核兵器として拡散しないよう産出国に戻す、という理屈が用いられる。

国際的な原子力カビジネスの、このような老獪な手口に対して私たちはこれまであまりに無知だった。しかし、もはや覚醒した。モンゴルだけの問題ではなく、私たち日本人の使うエネルギーの問題なのだから、国境を越えて市民として連携する必要があると感じている。

(国立民族学博物館教授)